

# 色彩好悪とパーソナリティの関係に関する検討

## The Relation between Color Preference and Personality Traits

近江源太郎

女子美術大学

Gentarow Ohmi

中村 美喜

女子美術大学美術研究科

Miki Nakamura

三木 真穂

//

Maho Miki

### 1 はじめに

色彩好悪と性格との関係については、世俗的に関心をもたれるけれども、定量的あるいは容観的に確認された例は多くない。

両者の関係が不確かな理由は、「好きな色」の意味の曖昧さないし多義性と、その測定方法とにある。従来報告をみても、多数の色見本から何点かの「好きな色」を選択した結果と、性格テストとの関係は、希薄なようである。色彩選択の特徴と性格とを関係づけようとした性格検査も、『ルッシャー・カラー・テスト』を除いて、いずれも間接的な方法で、各人がこだわりの色彩を求めている。

多数の色見本からの「好きな色」の選択結果が性格を反映していれば、テストとしてみた場合、はなはだ簡便である。しかし、それが有効でないとするれば、今少し条件を制限し、2つの色見本を比較して「どちらが好きか」を問うた結果ではどうであろうか。本報では、やや意図的に色見本対を用意して、その好悪と性格テストの結果とが関連をもつかどうかを検討した。

また、単に受動的に色を選ぶのではなく、より能動的な「配色をつくる」という事態で、多数使用する色と、性格との関係を検討した。

### 2 方法

#### 2-1 対比較調査

PCCSから系統的に選んだ色を対にして提示し、どちらが好きかを回答させた。色見本対は、52対であり、その内わけは次のとおり。①ライトトーン対ダークトーン（6色相）、②ビビッドトーン対ダークトーン（6色相）、③青と他の色相との比較（トーンを揃えて4トーン計20対）④紫と他の色相との比較（トーンを揃えて4トーン計20対）。調査は集団法で、1999年秋に実施した。所要時間は約20分。なお日を改めて、後に述べる質問紙法性格検査を行った。

#### 2-2 配色構成調査

PCCSから系統的に選んだ61色の色見本を与え、「好きな二色配色」10点を製作させた。色見本の大きさは40×20mm。調査は集団法で1999

年秋に実施した。被験者は大学生22名。所要時間約40分。なお日を改めて、後に述べる質問紙法性格検査を行った。

### 3 結果と考察

調査は3グループに分けて行っており、方法が若干異なるので、それぞれに分けて記述する。

#### 3-1 対比較調査とMPI

日本人男女60名（19才～65才）を対象としたデータからは、次の点が見い出された。

(1) トーンの好み、青の好み、紫の好みの各得点とMPIのE尺度、N尺度、L尺度の各得点との相関係数を求めると、有意な相関が認められたのは、わずか1項目のみであった。ビビッドパープルの好みとL得点との間に正の相関が認められた（.30）。L尺度は基本的には虚偽尺度である。しかし、回答の虚偽判定尺度としての意味のほかに、「性格の特徴に関係する場合が十分ありうる」とされている。例えば「防衛的な場合」「社会的経験のなさや性格の単純さ」などである。こうした点を含めて、今後検討すべきであろう。なお、紫系の他のトーンの好みあるいは紫系の全トーンの合計得点では、L得点との有意な相関は認められない。Lとの相関は、あくまでビビッドパープルに限ってのものである。

(2) 各色彩比較項目ごとに、上位群と下位群とを取り出して、比較すると(1)に述べたケースの他、ビビッドおよびライトトーン好み（ダルおよびダークトーンへの好みと比較して）の程度にE得点の有意な差が見られる（31.2：40.2）。つまり、“明るいあざやかな色を好む人は外向的”という関係である。これはMPIの著者であるEysenckの従来報告に一致する傾向といえる。彼は、色彩好悪データの因子分析から、明るい強い色対暗いにごった色という両極因子を抽出し、これが性格の内向一外向と対応する事を指摘している。さらに、彼は、向性および色の効果が脳皮質の興奮と制止に規定されると考える。今回の明るいあざやかな色を好む者は外向性が高いという関係はEysenckの理論に添ってはいる。しかし、上述のように相関係数で

は確認できないし、性格を上位群下位群に分けたときの色の好みの得点には、有意差が認められない。したがって、今回のデータからは向性と好む色の明暗・強弱との関係はかなり希薄とみなす方がよさそう。

### 3-2 対比較調査とEPPS

美術系女子大学生42名に、上記と同じ方法で52対の色についての好悪調査を行った他、『EPPS性格検査』を実施した。その結果、表1に示すような有意性が認められた。

(1) まず、青への好悪と性格特性との間にいくつかの有意な相関がみられた点に注目したい。従来の多くの好悪調査において、文化差を超えて青はもっとも好まれると指摘されている。したがって、そうした平均的な好みの傾向からのズレが何らかの意味をもつかどうかに関心もたれる。有意な相関のうち、ビビッドブルーと達成要求との関係は、Knappらの仮説に通じるものがある。この欲求の強い者は、支配・操作しやすい受動的な対象を、つまり、赤のように図になりやすい色ではなく、青のように地になりやすい色を好む、という考え方である。けれども、この考え方からは、ビビッドブルーよりも、ダルトーンの色がより好まれることになろうが、その点は今回のデータでは認められなかった。

(2) 紫への好悪を調査に取り上げた理由は、浅利式児童画診断法など、しばしば紫へのこだわりと性格との関係が語られるからである。その結果、有意ではあるけれど低い2つの相関関係が認められた。ビビッドパープルを好む者は追従欲求が強い、紫系を好む者は養護の欲求が強い、という関係である。しかし、これらについては、係数も低いので、本質的なものかそれとも現代の社会的な現象の影響を受けたものかを含めて、再確認すべきであろう。少なくとも今回のデータからは、紫への好みが特殊という傾向は認めにくい。

なお、EPPSには、回答の信頼性（一貫性）を測定する尺度が含まれているが、これらと性格特性との有意な相関はみられなかった。

### 3-3 配色構成調査

61色から選択して10点の2色配色を構成させた。つまり、20色を選択した結果と、MPIとの関係をみると、次のようであった。表2では有意な相関が認められたもののみを示している。

(1) E得点とはいくつかの相関が認められたが、

N得点との相関は検出されていない。色彩好悪と性格との関係では向性を優先して検討すべきである。

(2) E得点とライトトーン好みとの間に負の、ビビッドトーン好みとの間に正の相関がみられた。したがって、3-1に述べた“明るいあざやかな色”とひとまとめにすべきではなく、“あざやかな色を好む者は外向的”とみなすべきかも知れない。

(3) L得点と紫好みとは有意な相関があり、上述の3-1の結果と一致する。検討に値しよう。

表1 EPPSと色彩好悪との相関

配色 欲求	Tone		Blue					Purple				
	lt	v	lt	v	d	dk	計	lt	v	d	dk	計
達成				.33								
追従								.32				
自律					-.46	-.41	-.43					
親和					.31							
内面認知	33											
救護		.32										.32
養護												
変化					-.39	-.33						
持久					.38							
異性愛												
					-.41	-.45		-.32				

表2 配色構成に用いた色の頻度とMPIとの相関

好んだ色	E	N	L
lightトーン好み	-.44*	.02	.25
vividトーン好み	.48*	-.24	.26
Green好み	-.55**	.18	.00
Blue Green好み	.49*	.19	-.17
Purple好み	.13	-.29	.48*

### おわりに

色彩の選択傾向の特徴と性格特性との関係を分析して、いくつかの有意な関連を得た。向性とトーンおよび一部の色相の好みとの関係、MPIのL尺度と紫好みとの関係、若干の欲求と青系好みとの関係などは、今後よりていねいに確認してよいのではないかと推測される。

### 参考文献

- MPI研究会『新・性格検査法』誠信書房（1969）  
肥田野他『EPPS性格検査手引き』日本文化科学社（1970）